

クレメント・グリーンバーグの工芸観——「装飾」との関わりを中心に

中嶋 彩乃(京都大学)

戦後アメリカを代表する美術批評家クレメント・グリーンバーグ(1909-1994)はその主たる批評理論として、個々の芸術の媒体固有性への還元・純粹化を唱えたことで知られる。とりわけ絵画を中心に議論を展開したグリーンバーグは、絵画芸術はその固有の性質、すなわち平面性へと還元されるべきだと主張し、その理論を後ろ盾として抽象表現主義を牽引した。その功罪についてはここ半世紀ほどのうちに多方面からの批判がなされ、すでに相対化がなされていると考えて良いだろう。本発表ではこの数ある批判のうち「工芸」という観点からなされたものに着目し、議論の緒としたい。

近年の工芸分野においては、20世紀以降モダニズム的思考こそが工芸の地位の低下を招いたとしてしばしば批判が向けられる。工芸が芸術の対立項として位置づけられたうえで純粹芸術が称揚されることで、ある種のヒエラルキーが形成されたのである。

このような状況を作り出した背景として挙げられるのがコンセプトと実制作とを分離したものとみなし、後者を従属的なものとして扱う「モダニズム的正統」の考え方であり、グリーンバーグもそれに連なるものとみなされる。概念的要件を重視し、技術を含むその他のものを誰にでも入手できると軽んじるグリーンバーグの芸術観は、このような芸術対工芸のヒエラルキー形成の片棒を担いだ代表格に数えられるのだ。

だが、グリーンバーグは工芸を直接的な主題として論を展開してはいない。そこで本発表では、その批評に度々登場することとなる「装飾」という概念を介してその工芸観を照射することを試みたい。先行研究においてグリーンバーグの「装飾(的)」という語の使用が純粹芸術と工芸の分離を示す例としていまだ現存していることが指摘されるように、絵画の範疇における「装飾」の強調は、絵画の「危機」を招く要因にほかならない。「イーゼル画の危機」(1948)で危惧された絵画の装飾化とは、純粹還元の理論を突き詰め平面化へと向かった絵画が墮落するという屈折した事態を指す。このグリーンバーグの理路においては、絵画と比したときに装飾が劣位に位置することが自明のものとして語られているように思われる。

しかし、初期の批評を見渡せば装飾化はグリーンバーグが称揚する「抽象」化に伴って生じ得るものとして語られ、絵画にとって必ずしも否定的な要素とは捉えられてはいないことに気が付くだろう。さらに後年の論考においては装飾はもはや絵画性と対立する要素としては位置づけられていない。ここで浮彫りになるのが装飾内部での価値判断の分裂である。すなわち、絵画に許容され得る装飾と、糾弾されるべき「悪しき」装

飾とが区別され、後者の性質として所謂「工芸」的な要素が振り分けられることとなるのである。

以上の整理によって、グリーンバーグにおける「装飾」の位置づけの確立がいかんにして「工芸」的な要素の疎外へと結びつくのかを明らかにしたい。